

はじめに

私は2003年に医師となり近畿大学内科学腫瘍内科部門に入局して以来、一貫してがん治療と緩和ケアの両立に取り組んできました。現在も腫瘍内科では抗がん剤治療を担当するとともに、緩和ケア外来・緩和ケアチーム・連携ホスピスでは身体緩和担当医師として携わっています。

今回、私自身が腫瘍内科と緩和ケアの両者を勉強してきた経験をもとに、緩和ケアが苦手な内科医や外科医の皆さんのための、わかりやすく実践的な緩和ケアマニュアルを作成できないかと考え筆をとりました。緩和ケアを専門としない先生方が間違いやすいポイントを随所に盛り込んで強調しておりますので、内科医や外科医の皆さんにとっては「かゆいところに手が届く」内容を目指しました。また、緩和ケア医の皆さんにとっても「緩和ケア非専門医がどこを間違いやすいのか」が明確となり、チーム介入時などに役立つ内容にしたつもりです。このような内容ですので、初期研修中や緩和ケア医・がん治療医をめざす先生方の入門書として、開業や異動を機に突然緩和ケアにかかわることとなり途方に暮れている先生方の道標として、緩和ケアチームや緩和ケア病棟のスタッフの皆様への備忘録としてもご利用いただければ幸いです。

本書を用いる際の注意点ですが、緩和ケアはナラティブな側面も大きく、ある患者様には適切な治療やICが別の患者様には不適切なこともあり、同じ患者様においても「医学的に正しい対応」と「患者様の希望を踏まえた現実的な対応」が異なることもあります。本書でまずは標準的な対応を身に付けていただいたうえで、WHO方式がん疼痛治療法の5原則にもありますように「for the individual」「with attention to detail」を大切に診療に臨んでいただければ幸いです。

また、緩和ケア領域では適応外使用やエビデンスが乏しい治療も多いため、本書とともに添付文書や文献を実際にご確認いただいたうえで、個々の処方への適応をご判断いただければ幸甚です。

最後にご監修いただきました中川和彦先生、小山敦子先生、執筆中にご助言を賜りました近畿大学医学部内科学心療内科部門の羽多野裕先生、近畿大学医学部麻酔科学講座の岩元辰篤先生、兵庫県立加古川医療センター

緩和ケア内科の坂下明大先生，国立がん研究センター東病院緩和医療科の田上恵太先生，近畿大学医学部内科学腫瘍内科部門・心療内科部門・緩和ケアチームの皆様，そして近畿大学のがん診療を支えていただいている各部署の皆様に感謝申し上げます。また羊土社編集部鈴木美奈子様，谷口友紀様，山村康高様には企画段階よりご助言をいただき，出版まで継続的に支えていただきましたことを深謝致します。

2017年1月

近畿大学医学部附属病院がんセンター
緩和ケアセンター・腫瘍内科兼務
吉田健史